

一 般 演 題 抄 錄

## 6. 自己血輸血についてのアンケート調査報告

梶谷佳代 林部加代子 大塚志保  
麻田真由美 峯佳子 藤田往子  
金光 靖

近畿大学医学部附属病院輸血部

椿 和央 堀内 篤

近畿大学医学部第3内科学教室

当院ではこれまで比較的待機期間が長く計画的に貯血できる整形外科，形成外科，心臓外科を自己血輸血の主な対象としてきたが，現在凍結保存や MAP 液の導入，エリスロポエチンの使用により，貯血量の増大や対象症例の拡大を計ることが可能になり，さまざまな領域で自己血輸血は普及している．今回各科との協力体制を固めるためアンケート調査を行ったのでその結果を報告する．

### 方 法

各診療科医局にアンケートを配布し自己血輸血に対する認識・現状・要望について調査した．

### 結果および考察

医局員130名に行ったアンケート調査の回収率は73%で，その集計結果によると精神科を除く全ての科において関心があり，未実施の科においても50%で適応症例があった．実施していない理由として「貧血がある」「認識不足」などがあげられた．実施科では主に液状保存法が

行われ，形成外科では凍結保存法，心臓外科・整形外科では術中回収式自己血輸血法も併用されている．また，心臓外科・整形外科ではエリスロポエチンを使用し，何らかの基準を設けていた．

自己血実施上の問題点としては「採血の人手不足および手間」「コストの問題」があり，同種血併用の理由としては「必要量の増大」や「予測ミス」などがあげられた．

自己血輸血時におけるクロスマッチの実施は「不要だが医者・患者・ナースで確認する」という意見が多かった．またインフォームドコンセントでは自己血を貯血しても使用せずに済む場合や，やむを得ず同種血を使用する場合があることなどを説明していた．

自己血に期待することは「感染症の防止」が最も多く，「勉強会の実施」「プロトコルの確立」などの要望も目立った．今後，自己末梢血幹細胞の凍結保存，エホバの証人に対する自己血輸血，周術期の自己血輸血の管理などさまざまな分野における自己血輸血の見直しが必要であると思われる．